玻璃の花籠

登場人物紹介
◀ 亜樹〈アジュ〉
次期竜王候補筆頭。
沙羅の夫。
◀ 沙羅〈さら〉
現竜王の一人娘で
亜樹の正妃。
▲ 雷史〈ライシ〉
「火の一族」本家の跡目。
次期当主の座を約束された
立場にある。
▲ 余市〈ヨイチ〉
雷史の身の回りの
世話をする下男。
▲ 秋茜〈あきあかね〉
亜樹の元側女(そばめ)。
その座を退いた後、雷史
のもとへ嫁ぐことに。
▲ 柚羽〈ゆずは〉
秋茜のもとで
働いている侍女。

目次

玻璃の花籠　7
玻璃の夢　223

玻璃の花籠

序

夜明けを迎えたばかりの中庭には、白い靄が立ちこめていた。

本館の奥、ひっそりと静まりかえった場所にある対の館から、そこを眺めていた秋茜は、次の瞬間にその口元から小さなため息を漏らす。しかしそれは誰にも悟られることなく、目の前の白の中へと溶けていった。

紫を帯びた赤色の髪、菫の色に染まった大きな耳のような形のそれは、音を聞きとる機能と魚のエラのような機能を兼ね備えている。この海底の地にあって、西南の民と言われる者たちは皆、褐色に近い肌をしていると思われていたが、幼き頃からあまり野外に出ることがなかったためか、彼女のそれは驚くほどに白く透き通っていた。

時にそれは「美しい」と称され、時にそれは「おぞましい」と蔑まれもする。しかし、そのどちらに評されようと、当の本人はとくに気にも留めていない様子であった。

どこかで、目覚めたばかりの鳥たちのさえずりが聞こえる。その方向を確かめようと彼女が伏せていた瞼を開き濃緑の瞳を朝日に映し出した頃、中庭の靄は目に見えてわかるほど薄く頼りないものに変わっていた。その代わり、ささやかではあるが手入れの行き届いた庭木や岩がその姿を現し始める。そしてまた、鳥が高くさえずった。久方ぶりに故郷に舞い戻って早一月、実家には戻らずこの別所で暮らしていた。それがなにを意味しているか、彼女はすでに承知している。己の行く末を自らの意思で決めることも叶わない、そのような身の上だと割り切るしかないのだ。

――この靄が、永遠に晴れることがなければ良かったのに……

美しい輝きに照らし出されながらも生気を感じない彼女の瞳は、まるでそう物語っているようであった。

海深く、ひっそりと姿を隠す「海底国」――この地はその全土を統治する竜王の力で張られた「結界」に守られている。海底に点在するあまたの「集落」が、細い「街道」で繋がり形成されていた。「結界」の中は空気よりも重い「気」と呼ばれるものに満たされている。この地に住まう民の耳が大きく張り出したエラのような仕様になっているのは、呼吸では足りない酸素を身体の中に取り込む機能を備えているためであった。いつの頃から人間界と離れたこの地に彼らが住まい始めたのか、あるいはそもそも別の生き物であったのか、あまりに遠き昔のことを知る者はない。いにしえよりの歴史を伝える書物も数多く残ってはいるが、それも真実にたどり着く手がかりにはほど遠かった。

鳥が高く羽ばたくその天の彼方、結界の遙か向こうには、異形の者が暮らす「陸」があるのだと言われている。だが、その場所への唯一の門は固く閉じられ、結界の外には一歩も出ることができない海底の民にとって、そこは夢の世界よりも遠き場所であった。むしろ、ほとんどの民はその事実をただの作り話と考えていると言ってしまっても良い。互いが関わりのないまま長きを過ごしてきたため、ここでは地上とはまったく違う暮らしが営まれている。

秋茜が身につけている衣服は、小袖に長袴。その上から身丈に余るほどの「重ね」と呼ばれる衣を羽織っている。この地では一定の階級以上の女子が用いる着衣で、彼女の重ねには金銀の色粉を散らした美しい布絵が施されていた。それをひと目見れば、かなり腕の立つ職人の手がけたものであることがわかる。

それをまとった彼女の立ち姿も衣に負けない程美しい。刻一刻と輝きを増していく空間で、その姿はさらに際立っていく。いつしか鳥の声も聞こえなくなり、静けさだけが残った。

ゆうるりと気が流れ、床まで流れる美しい髪が舞い上がる。彼女は言葉もないまま、ふたたび瞼を閉じた。

「――秋茜様っ……！」

突然、静寂は破られる。

本館とこの対の館を繋ぐ「渡り」と呼ばれる屋根付きの長い通路を、足早に進んでくる人影がある。身丈は秋茜の胸元にも届かぬほど、肩よりも少しだけ長い髪をふわふわと揺らしている小柄な姿は、まるで女の童のそれであった。だが、彼女が身につけているのは間違いなく「侍女」と呼ばれる身分の者がまとうものである。

「出立の準備が整いました！　どうぞ、表までお越しくださいませ」

このたびのお役目に合わせて生まれて初めて施された化粧が、あまりに初々しい。着慣れぬ装束に足を取られながらも、彼女はようやく秋茜の下まで辿り着いた。そして、主の姿を瞳に映して、パッと顔を輝かせる。

「今日のご衣装も、とてもよくお似合いです！　なんてお美しいのでしょう……うわっ、なにやら不安になって参りました！　私っ、こんなに素晴らしい御方の侍女なんて……本当に務まりますかどうか……」

慣れない館言葉に舌をもつれさせながらも、娘は胸にこみ上げてくる感情を主になったばかりの自分へ素直に伝えようとしてくれる。つい数日前に山深い里より出てきたばかりだと聞いているが、そのせいか身のこなしも言葉遣いも、なにもかもがたどたどしい。しかし、秋茜はその頼りない姿に眉をひそめる代わりに淡い微笑みで応えた。

「大丈夫ですよ、柚羽。誰でも皆、最初はわからないことだらけなのです。あなたにはこれからわたくしがゆっくりと、様々なことを教えてあげましょうね」

その声は、およそ人のものとは思えぬほどの美しい調べだった。例えようのない程透き通った響きを耳にして、柚羽と呼ばれた娘はしばらく返答をするのも忘れてしまった様子である。

「さあ、そろそろ参りましょうか」

「はっ、……はいっ！」

優しく促されて、娘はようやくハッと我に返る。

「こ、こちらにどうぞ！　あっ、お足元にお気をつけて――」

そう言い終える前に、彼女の方が袴の裾を踏んで転びそうになる。秋茜はにわかにこみ上げてくる笑いを噛み殺しながら言った。

「いいのですよ、そのように慌てなくても」

その声に、娘の蜜柑色のエラ耳が真っ赤に染まった。衣からわずかに見える指先も、同じ色になっている。

「すっ、すみません！　ふ、不慣れなもので……」

柚羽はさらになにかを言いかけたが、そこで息を呑む。何故なら、ふたりの行く手に新たな人影が現れたからである。

その姿を瞳に映したとき、秋茜の顔からは血の気が引いていく。

「これは……邇桜様」

絞り出すような声でそう告げると同時に、秋茜は板間に膝をつき頭を低く落とす。その姿を見た柚羽も、慌ててあとに続いた。

「このような場所までお越しくださるとは……誠に恐縮でございます」

そこまで言い終えても、秋茜は頭を深く垂れたまま。衣を押さえる指先が小刻みに震えていた。

「そのように畏まることもないだろう、早く面を上げなさい。お前は儂の身内、可愛い姪ではないか。この朝は西南の大臣としてではなくお前の伯父として、輿入れの見送りに参っただけだ。楽にするがよい」

傍らの秋茜がゆっくりと顔を上げるのに続いて、柚羽も恐る恐る頭を床から離していく。

ふたりの目の前には見るからに厳めしい男が立ちはだかっていた。深く皺の刻み込まれたその面差しを見れば、すでに高齢を迎えているであろうことがわかる。だが、堂々とした立ち姿は老いという言葉からはほど遠い。恰幅の良い身体は豪奢な衣できらびやかに飾られており、その姿をひとめ見ただけで、この者がかなりの身分にあることが容易に推察できた。

彼は今、満面の微笑みを浮かべている。それにもかかわらず、口髭をたくわえたその面差しは、見る者の心の臓を一瞬凍らせてしまうほど恐ろしいものに感じられた。

「……もったいないお言葉、身に余る光栄にございます」

秋茜が伏し目がちなままにそう答えると、邇桜は満足げに微笑んだ。

「お前はたいそう賢い女子だ、己の役目は十分承知しているであろう。その美しさを以ってすれば、火の一族が若造を虜にするなど造作もないこと。このたびの働きも、おおいに期待しておるぞ」

それだけ言い終えると、返事も聞かずに彼はゆっくりときびすを返す。そして、その姿が悠然とした足どりで渡りの向こうに消えていくまで、ふたりはその場から動けずにいた。

やがて、柚羽が我慢しきれないように口を開く。

「……すっ、すごい！　あの御方が、西南の大臣様なのですね！　噂には聞いていましたが、なんというか……その……」

「柚羽」

秋茜は諭すように短く娘の名を呼び、その言葉を遮る。

「もう、そのくらいにしておきましょうね。この場所は、あなたが思っているよりも声が通るのですよ」

ハッと口をつぐんだ娘に、彼女は優しく微笑みかける。

「さあ、急ぎましょう。あまり皆を待たせてもいけませんから」

それだけ告げると、秋茜は自分が先に立って歩き出す。その姿からは、先ほどまでの迷いがすっかり消えていた。

やがて、ふたりを乗せた牛車は靄の晴れた街道をゆっくり西へと進み出す。目的の地へと近づくにつれ、秋茜の表情からは次第に色が消えていった。

一　宴の夜

本館を入ってすぐの大広間は、内も外も明るいさざめきに満ちていた。

御年十八を迎えた領主の跡目殿の下へ、いよいよ正妻となる方がお輿入れになるのである。お相手はなんと大臣家と縁続きの方、これはまたとない誉れと誰も彼もが浮き足立っていた。

諸処の村長はもちろん、地元の有識者もこぞって祝いの席へと駆けつけ、それが叶わぬ下々の者たちにも酒や珍しい菓子がふんだんに振る舞われる。領地をあげての祝賀とあって、さながら祭りのような騒ぎであった。

すでに夜も更け、そろそろ寝の刻を迎えようという今では、さすがに幼子の姿は消えたが、宴の賑わいは未だ留まるところを知らない。酌み交わされる酒、次々と運び込まれ、下げられる膳。それを運ぶ女たちの華やかな桜色の装束が目に飛び込んでくる。

この広間にいる者たちは皆、赤色の髪と濃緑の瞳を持つ西南生粋の民たちであった。

海底国では、余所者同士が所帯を持つことも少なくはない。しかし西南の民の血はどこまでも濃く、どのような土地の相手と縁づこうと、自らの姿や気性を色濃く受け継ぐ子が生まれた。

民の数が増えれば、自ずと大地は潤う。農林業を生業として暮らす者が多い土地柄では、それがさらに顕著に表れる。そのことが、海底全土において西南の集落が徐々に勢力を伸ばしていった理由のひとつであった。

だが、そのような事実も、今宵の宴の主役となった雷史にとっては、なんの意味も成さない戯れ言でしかなかった。広間の奥、一段高くなったその場所に座する彼の瞳に映るのは、酒が回り歌い踊る間抜け顔の者たちの醜態ばかりである。

……馬鹿馬鹿しいにも程がある。

何杯目になるのかすでにわからなくなっている酒をあおっても、胸に積もるのは忌ま忌ましさばかり。いくら待っても、少しの酔いも訪れない。客人たちの浮かれた姿も、苛立ちに拍車をかけている。その者たちが自分を祝うために訪れているのだと思うと、余計に腹が立った。

その気もなしに、ふと隣を向く。彼の動きに合わせて、高い位置で結われた髪も静かに流れた。

この地の成人男子は、肩よりも長く伸ばした髪を、その地位に合わせた高さでひとつにまとめる。男子でありながら女子同様に長く垂らしたままの姿は王族の印とされ、それ以外の者に許されることはない。祝宴のために頭の上で形良く結われていたそれも、昼から延々と続く式の中で少し乱れていた。赤い後れ毛がねっとりした夜の気の中で浮遊する。

その眼差しの先には、ひとりの女子が俯いたままで座していた。

彼女もまた、この宴席の者たちと同じ赤色の髪を長く伸ばしている。ただ、西南の赤毛もよくよく見れば、それぞれに微妙な違いがあった。目の前の女のそれはどこか青みがかっており、館内に配された蝋燭の光に照らし出されるとさらにその色が際立つ。

さすがに噂どおりの美しさだ。領主の跡目という立場にある自分の前には、今まで数えきれぬほどの女子が喜んで身を投げ出してきたが、これだけの上玉には未だお目に掛かったことがない。

この者は、都暮らしが長いと聞いている。そのためだろうか、集落の娘たちとは違うなんともいえない匂やかな色香がある。美しく化粧を施した肌はしっとりと滑らかで、今は燭台の灯りに照らし出されて妖しいほどに輝いていた。

だが、なぜであろう。その身体からは生気というものが感じられず、まるで人形が隣に座っているような気がする。目の前の膳にも手を付けた跡がない。それどころか、よくよくみれば箸袋から箸も出してないのだ。

艶やかな髪には様々な装飾が施され美しく装われているが、それが結果として彼女の無表情さをさらに際立たせているようである。何枚も色を重ねた婚礼用の衣装もそれは素晴らしい仕立てであり、もちろんとてもよく似合っていた。ただ、あまりに隙なく着込まれているためか、端整な顔立ちと相まって、とても頑なに見えてしまう。

女も彼の――雷史の視線に気づいたらしく、一瞬こちらに瞳を向けた。しかし、すぐにまた俯いてしまう。膝の上で握りしめられた双の手は、病的な程に白い。

素っ気ない態度が許し難いほどに癪に障る。それは今初めて感じたわけではなく、この宴席が始

まる前の顔合わせのときから、ずっと気になっていたことだった。

確かに、初対面ですぐに打ち解けることができるとは考えていなかった。だが、さすがにこれはひどすぎるのではないか。

――なんて、無礼な女だろう。そんなに自分が偉いと思っているのか。西南の大臣、邇桜様の姪に当たると聞いたが、その身の上を誰もが一様に有り難がると思ったら大間違いだ。

雷史は思わず盃を投げつけてやろうと思ったが、それではあまりに大人げないと思い留まる。気性の荒い西南の血を色濃く受け継いでいても、まだそれくらいの理性は残っていた。

「余市っ！」

彼は吐き捨てるように、下男の名を呼んだ。すぐさま、ひとりの男が控えていた縁側の方から飛び出してくる。

「お呼びでしょうか、若様」

余市、と呼ばれた男は少し低い場所に跪く。彼は浅黄の水干に短い麻の袴を身につけていた。

「俺はこれから表の居室に戻る、父上にはお前から伝えてくれ！」

「……は？」

あまりに信じられない主の言葉に、余市が慌てて顔を上げる。

「あ、あのっ、若様。こ、今宵はそのような訳には……」

そこまで言いかけた彼は、ちらりと主のとなりに視線を泳がせる。しかし、そうしている間に、雷史はさらに激しく言い放った。

「俺は先に行くぞ。お前はさっさと用を済ませて、この膳を運んでこい！　こんな場所でいくらあおっても、酒がまずくなるばかりだ！」

荒々しく立ち上がると、その勢いで彼の周囲に気流が生まれる。無駄に華美な衣装が、それに合わせて揺らめいた。こんなもの、早く脱ぎ捨ててしまいたい。もうこれ以上、猿芝居を続けるのはまっぴらだった。

「若様っ……！」

余市の必死の声が背中に届く。だが、雷史は二度と振り向くこともなく裏口から外へ飛び出していった。

そのとき、女がふたたび顔を上げる。

そして、去っていく男の背中を座したままの姿で静かに目で追い続けた。青光りする長い赤髪が流れに任せて揺らめいていたが、そのきらめきに気づく者は誰もいない。やがて気流が途切れ元通りの静寂が戻ると、彼女は誰にも気づかれぬよう微かな吐息を落とした。

雷史がやって来たのは、本館とは目と鼻の先にある平屋のこぢんまりした建物である。周囲を木々に囲われたそこは、人目を避けた隠れ家のようにも見えた。

このように独立した家屋をこの地では「居室」と呼び、本館と渡りで繋がっている「対」とはまったく趣が異なる。彼が今、足を踏み入れようとしているそこは、居室の中でもかなり規模の大きなものであった。柱や梁に用いられている木材、屋根の瓦などからもここに住む者が相当の身分にあることがわかる。

元服を迎え成人となった十三の春にこの居室を与えられ、彼はそれからずっと他の家族から離れて気ままな暮らしを続けていた。

本館の生活はどうも性に合わない。あの場所には両親の他に大勢の弟妹、そして父が手をつけた女子たちやその子供たちまでいる。細かく区切られた対は朝から晩まで人の気配が止むことはなく、気の休まる暇もない。このたびの婚礼により本館に新しい対をひとつ建て増してくれるという話もあったが、もちろんそれも断った。

「まあ、若様……！」

中の灯りが漏れる引き戸を乱暴に開く。すると、すぐさまひとりの女子が奥の間から飛び出してきた。

「これはいったい、どうなさいましたか。今宵はあちらでお休みになるはずでは……？」

まだあどけなさを残した面差しの娘は、驚きを隠せない表情のまま次々と訊ねてくる。あまりのことに、跪いて出迎えの一礼をすることすら忘れてしまっているようだ。

「――着替えを。とにかく早く楽になりたい、今宵はもう疲れ果てた！」

彼は娘の声を振り払うようにそう言い放ち、身につけていた婚礼用の豪奢な上掛けを、その下に重ねた何枚もの薄物を、次々と乱暴に床に落としていく。さらに裾に華美な金銀の文様が入った長袴の腰紐を解いて振り落として足を抜き小袖だけの姿となったところで、ごろんと板間の上に横たわった。

この部屋は履き物を脱いで上がるようになっている。床はどこも板敷きで、身分の高い者が座するときには一段高くなるよう敷物を用いる。夜に休むときには、しとねと呼ばれる寝具を使う。西南の集落の家屋のほとんどがそのような造りになっていた。

小袖とは上半身に身につける衣服で、その丈はかろうじて太股の半分を覆う程の長さ。無造作に横になれば、そこから逞しい青年の足がすべて見えてしまう。彼は誰の手を借りることもせず、後ろ手に髪を解く。バラバラと赤髪が肩に床に落ちた。

その姿をしばし呆然と眺めていた娘もややがてハッと我に返り、床に脱ぎ捨てられた婚礼衣装を畳んで脇に片付ける。そして、一度奥の間に下がり一揃えの着替えを手に戻ってきた。

「わ、若様……これを」

横たわった人の脇に跪き、衣を差し出す。娘の声は、未だ大きく震えていた。

彼女がひどく怯えるのも無理はない。雷史はひどい癇癪持ちであり、一度荒れ始めると手の施しようがなくなる。下男の余市などはそのたびに足蹴にされていて、娘はそれを目の当たりにしていた。

「美祢」

短く名を呼ぶと、雷史は娘の細腕を荒々しく掴む。ふたりの間に、さらりと衣が落ちた。

「来い」

そのまま自分の方へ引き寄せ、首筋に熱い唇を這わせる。さらに胸の袷を開き、その中に手を突っ込んだ。

「……あんっ、若様ぁっ……」

美祢は抵抗するどころかその動きを助けるように身をのけぞらせ、甘い声を上げる。そして、もっと激しくしてくれとばかりに、その身を雷史にすり寄せた。

夜装束というものはそもそも男女の行為をしやすいつくりになっている。袴の帯は軽く結ばれており、片手で簡単にほどける。美祢は雷史の手によって、あっと言う間に生まれたままの姿となった。その身体を彼は慣れた手つきで愛撫していく。

「わ、……若様っ、今宵は、今宵から三日間はあちらでお休みにならなければならぬと決まって……あ、あうっ……！」

その言葉は身体に次々と宿る熱に容易く遮られてしまう。

器用な舌づかいで桜色の乳首をなめ上げられてしまえば、美祢にもう選択の余地はない。囚われたその腕から逃れようにも、自分の身体は素直に従ってしまう。そうしているうちに足を大きく開かれ、その奥に指が這っていく。

「……はあっ、若様っ、このままでは美祢が御館様のお叱りを受けてしまいます。だから、……あぁっ……」

「なに？　父上が、どうかしたのか？」

早くも快楽の海に溺れてしまいそうになっているその表情を楽しみながら、雷史は意地悪く震える耳元に囁く。彼の右手は、もはや美祢の意思ではどうにもならなくなっていた場所に辿り着いていた。入り口を指でなぶると、もうじらす必要もないほど潤っている。

「あ、あのっ、……ああーっ……！」

体勢を変え、そのまま一気に自身で貫く。最初から激しく動けばもう、それきり娘の口からは二度と躊躇いの言葉が発せられることはなかった。残るのは、ただ甘く自分を呼ぶ声と喘ぐ声、熱い吐息。

力任せに腰を打ち付けていると、次第に意識もどこかへ飛んでいく。この娘が愛おしいという訳ではないのだ。ただ、己の欲望を満たしたい、行き場のない怒りを吐き出したい。

――そう。

その瞬間の雷史は、自分がなにに対して憤っているのか、それすらもわからなくなっていた。

雷史の家は「火の一族」と呼ばれ、西南の集落においては大臣家を支える重臣、「三本柱」のひとつとされていた。大臣家の直轄地のすぐ隣にある広大な領地の管理を任されており、代々豊かな生活が保障されている。一族は領地の一角に誰もが羨むほどの広い屋敷を持ち、先の本館を含めて数えきれぬほどの邸宅や居室を構えていた。

この地を取り仕切るのは「大臣家」である。

大臣とは各集落に配置される統治者で、竜王直属の家臣として絶対的な権力を誇っていた。時には直接、竜王に意見することもある。

その中でも、西南の大臣家はいにしえより竜王家との繋がりがとくに強く、他の追随を許さない。今の竜王、華繻那の姉が大臣家に降嫁されていることにも、それは表れている。

それだけではない。歴代の竜王の正妃も、西南の大臣家より上がった者が圧倒的に多かった。そうなれば、自ずと都における影響力は強くなる。

今や飛ぶ鳥を落とす勢いである大臣家の重臣となれば、その地位は揺るぎない。海底国では親から子へ代々受け継がれる世襲が一般的であったから、よほどのことがない限りその身分が剥奪されたり他の者に渡る心配もなかった。

幼き頃から、相当贅沢な暮らしをしてきたと思う。雷史の母は父の正妻であり、その立場は他の女子どもとは別格である。しかも彼は長子であったから、ゆくゆくは父の跡を継いでこの地の領主となることが誕生の時からすでに決まっていた。

他の権力者と同様に、父には正妻の他にも「側女」と呼ばれるお手つきの女子が幾人もおり、当然その者たちにも子がいる。だが、側女の子はもちろん、正妻である母から生まれた弟妹と、長子の雷史とでは、その扱いに明らかな差があった。

乳母にも相応の家柄の者が選ばれ、常に大勢の侍女に囲まれ世話を焼かれる。教育係の老師もわざわざ都より呼び寄せた者が務めた。他の誰よりも優美な衣装を身につけ、一流の道具を与えられる。そのような立場が当然のことに思えていた。

それだけではない。彼は見る者を魅了してしまう美しい容姿と共に、逞しい体躯をも持ち合わせていた。学ぶことにおいては老師が舌を巻くほどの聡明さを見せ、また武術の習得も早い。なにをやらせてもあっという間に負け知らずになってしまうため、手応えのある相手を探すことに苦労した。

自分は誰よりも偉い、誰よりも優れている。そんな傲りが絶えず彼の心にはあった。

しかしながら、元服を済ませた十三の春に初めて父と共に西南の大臣家の館に出仕した彼は、その晴れやかな席で、すぐさま自分の置かれた境遇を嫌というほど思い知ることになる。

——父上は、ただのでくの坊だったのだ。

鋭い子供の感性に、まざまざと映し出される人間関係。他の重臣たちが大臣様を相手に派手な議論を繰り広げている中で、父ひとりだけが静かに言いなりになっている。いったいこれはどうしたことだろう、普段家人の前で我が物顔に威張り散らす姿とは、まったくの別人ではないか。情けないにも程がある。

「火の一族」の頭領の真の姿に愕然とし、自分がこの場所に父の子として同席していることが誠に耐え難かった。顔から火が出るほどの恥ずかしさというものを、そのとき初めて知った。いや、そんな生易しいものではない。まこと、天と地がひっくり返ってしまったような意識の変わりようであった。

七日間の出仕を終えて領地に戻った夜、美祢を初めて抱いた。

彼女は乳母の子であり、幼き頃からの顔なじみである。いつの間にか、侍女の真似事をして身の回りの世話をするようになっていた。早くに館を去った母親の代わりをしようと思っていたのかも知れない。

美祢に特別な感情を持ったことなど一度もなかったが、そのときは怒りを逃す手段が他に思いつかなかった。力任せに荒れ狂い、すべての欲望を吐きだしたあと、例えようのない空しさが彼の胸を強く締め付けた。

自分の身に起こったことを受け止めきれないでいる美祢を部屋に残し、そのまま居室をあとにした。そして、あの父が贅を尽くして造らせた自慢の遣り水の中にはだけた小袖のままで飛び込み、冷たい水の中に頭まで浸かった。天から降り注ぐ光の帯の輝きとは裏腹に、ずっしりと沈み込んでいく心。それはもう永遠に晴れることはないように思えた。

大臣家に出仕する同年代の者たちの中でも、雷史はすべてにおいて際立った実力を見せていた。長刀を流れるような動きで操るその姿が、まるで美しい舞のようだと言われ、また学問にも優れ、たいそうな物知りである上に雅楽にも精通している。彼が大臣のお気に入りになるまでに、そう時間はかからなかった。

しかしながら。

どんなに頑張ったところで、所詮はあの父の子だ。ちょっと意見を口にしただけで、たちどころに「火の一族の出る幕ではない」と差し出口を咎められた。雷史に求められていたのは、出世欲の人一倍強い大臣の聞き役に徹すること。常に主であるその人を立て、機嫌を損なわぬように細心の注意を払うのみであった。

大臣は正妻である翠の君様、すなわち現竜王の姉君との間に授かった末の息子を次期竜王とすべく、年少の頃より都に上がらせていた。現竜王、華繻那様にはただ一人の御子しかおらず、しかもそれは姫君である。大臣は姫君を息子の正妃に迎えることで、次の竜王の位につかせようとしていた。

どう考えても夢物語にしか思えないその話も、西南の大臣に掛かれば現実のものにすることは容易い。しかも、彼にとって自分の息子が竜王になるということは、ひとつの通過点でしかないの

だ。その野望は留まるところを知らず、ゆくゆくは竜王家に代わって西南の大臣家が国のまつりごとを執り行うところまで辿り着きたいらしい。

そのために息子が晴れて竜王となった後、次の竜王の座も、西南の集落出身の女子が産んだ男子に座らせたい。大臣はその願いをなんとしても叶えるべく、多くの側女候補を都に送り込んでいた。

我が地位をさらに強固に揺るぎないものにするためにあれこれ画策するのが、この大臣の生き甲斐であるようだった。大臣家に出仕するたびに、自分にとってはどうでもいい、欲に塗れた話ばかりを延々と聞かされる。もう、うんざりだった。

この春のことである。雷史にひとつの婚礼話が舞い込んできた。

大臣家の重臣と言われる家柄の、しかも長子である。今までにも、そのような話は方々から持ちかけられていた。しかし、両親の希望に敵う女子がなかなか現れず、気がつけば元服から五年が過ぎている。

今では美祢の他にもねんごろになった女子が幾人もいるが、彼女たちはとても正妻の器ではない。領主の跡目という立場では、正妻を迎えて跡取りを産ませることも大切な役目であることはもちろん雷史も承知している。自分も時期が来れば、しかるべき家の女子を娶ることになるのだろうとは考えていた。

たとえその者とそりが合わぬとしても、甘んじて受け入れるほかない。何年にもわたる大臣家への出仕で、適当にその場を取り繕う術は身につけている。己にとっての大事ですら、他人任せにしてしまえる投げやりな気持ちに雷史はなりつつあった。

そんな折、中庭に我先にと咲き誇る花々が目にも鮮やかな昼下がりのこと。大臣の急なお召しから戻った父が、雷史を本館の奥の間に呼んだ。

急ぎ支度をして出向くと、父はいつになく上機嫌である。しかしながら、その口から語られた話はあまりに意外で、憤りすら感じるものであった。

「戻り女……ですと？」

父の言葉を一段低い場所で静かに聞いていた雷史であったが、その話が核心を突いたところで思わず眼をむいた。

「左様である。だが、ただの戻り女ではない。先だって、都で婚礼の儀を終えられたばかりの大臣様のご子息、亜樹様。次期竜王候補に間違いないと言われているその御方の側女であったという者だ。しかも大臣家とは縁続き、これはまたとない栄誉なことであるぞ……！」

父は雷史の戸惑いにはまったく気づかず、みっともなく浮かれている。とりあえず敷物の上に座しているが、今にも踊り出しそうな有様であった。扇を持つその手元も、小刻みに震えている。

雷史は怒りのあまり、すぐには次の言葉を発することができないでいた。

冗談じゃない、なんてひどい話だろう。「戻り女」とは、一度誰かに縁づいて離縁された女子のことを指す。言うなれば、使い古し。そのような者を好きこのんで妻に迎えたいと思う男がいるのだろうか。

亜樹様――すなわち、西南の大臣の末子にあたるその人は、雷史の父がたった今口にしたとおり、

つい最近、竜王様の姫君と婚礼を挙げたばかり。そして、どういうわけかその直前に、彼はそれまで召し抱えていた側女をすべて里に帰した。

側女とは竜王様のお側に侍る女子であり、見事御子を産んだときには正妃にも劣らぬ地位を得るという。しかしながら、亜樹様にはどの側女にも未だ御子がなかった。このままでは正妃様との間にも無理ではないかと、新婚の今からそこら中で噂されている。

大臣の計らいにより、里に戻ったそれらの女たちは、次々と新たな伴侶の下へ嫁いでいったと聞いている。しかし、それも雷史から見れば体の良い払い下げにしか思えなかった。その様な女子を大臣家がいつまでも召し抱えていれば、大変なお荷物になる。それならば、誰かに譲り渡してしまいたいと思うのが当然だろう。

確かに亜樹様のお手つきであれば、戻り女とはいえ大変な価値になることは間違いない。なにしろ、その者と次期竜王となる御方とは深い縁で結ばれている。上手く頼めば、竜王家とのつながりを得ることも可能になるのだ。そのように考えれば、決して悪くない縁談である。中には有り難がる者もいるだろう。だが、自分はそうではない。

しかも、このたび雷史にあてがわれようとしているのは、二十をいくつも越えた女だというではないか。いくら見目形が整っていて美しさでは側女の中でも際立っていたと言われても、とても納得できる話ではない。どうして自分が用済みとなったお手つきの女子を娶らなくてはならないのだ。こんな話を嬉々として承諾してきた父の気が知れない。

――ご自身が、そして我が一族が、軽く扱われたことにどうして気づかないのだ。まったくおめでたい御方だ。

「このお話は、お断りさせていただきたく思います。そのような優れた女子であれば、他にいくらでももらい手があるでしょう。父上から、大臣様にそうおっしゃってください」

あの大臣様に逆らうなど、してはならないと重々承知している。だが、このたびのことは自分の一生をも左右する重大な決定。いくら臣下の身であったとしても、黙って受け入れるわけにはいかない。

だいたい、大臣家の重臣という家柄であれば、大臣様のご息女をいただくことも叶う身の上ではないか。こちらから願い出ることはさすがに恐れ多いが、道に外れた話ではないはずだ。

しかし、意を決して申し上げた雷史の言葉に、父はしばし呆気にとられている。なんでそんな馬鹿げたことを口にするのだと言わんばかりの表情だ。

「――あのっ……」

しばらくはこちらも黙っていたが、そうしていても埒があかない。もうひとこと、はっきり断ろうと口を開きかけたところで、父の声がそれを遮った。

「何故わからぬか、この馬鹿者め！　大臣様の仰せになるお言葉は、この地では神の声にも勝る。お前如きの小せがれが、泡吹いて反論したところでどうなることでもないわ！　すでにこれはお受けしたこと、婚礼の日取りも決まっておる。今後は二度と、そのように知ったような口を叩くのではないぞ……！」

「父上！」

怒りのあまり、それまで座していた敷物がずるりと地に沈んでいく心地がした。がっくりと両肩が落ち、身体を支えるために板間についた両腕が大きく震えている。

そんな雷史をひとり残し、父はさっさと自分の寝所に戻ってしまった。

彼は今、自分の娘ほど年の違う侍女に熱を上げている。聞くところによると雷史よりも年下だというその女子を、これから召して楽しもうとしているのか。

「……畜生……！」

板間を思い切り拳で打ち付ける。両親の居住まいとなっている奥の部屋は、とくに頑丈な造りになっている。ここに敷き詰められた板もそれは同じであった。そこに穴が開くのではないかと思われるほど、次々と両の拳を振り下ろす。やがて、指の皮がすり切れてそこから血がしたたり落ちても、彼はその行為を止めようとはしなかった。

「奥の居室の方は、今頃たいそうお怒りでいらっしゃるのではありませんか？」

美祢は水桶を用意すると、すすいだ手ぬぐいで主の身体を清めていく。雷史は背を向けたまま、聞こえないふりをしていた。瞼を閉じたまま、勝ち誇った響きを辿る。

美祢の声は、間違いなく勝利者のそれであった。彼女自身にそこまでの自覚はないかも知れない。だが、聞く者にははっきりと伝わってくる。

雷史が正妻を迎えることとなり、美祢も今までどおりではいられなくなることを覚悟していたはずだ。いくら愛妾と言われ格別の寵愛を得ていようとも、彼女の身分では雷史の正妻の座に座ることは到底できない。このようにして情けをかけられることでしか、生き残る道はないのだ。

「そう、……ですよね。あちら様は、所詮は戻り女でいらっしゃるのですもの。このように盛大に迎えられて、あんな立派な居室をいただいたのですから、それだけで十分ですよね」

雷史を受け入れたあとの、ほんのりとした艶。それが言葉の端々に感じられた。

正式な婚礼を挙げた相手の下には、三晩続けて通うのが決まりとなっている。いくら他に大勢のねんごろな女子がいようとも、その習わしだけは必ず守ることになっていた。その約束を破ってまで自分の下に留まってくれた、美弥はそう思っているに違いない。

「……俺はもう寝るぞ！　お前も早く出て行け！」

雷史は、軽く身じろぎをして、背中で短く言い放つ。

長い付き合いの仲であるから、娘の方も心得たもの。彼女はさっさと水桶を持ち、次の間へと下がっていった。

二　夜闇の行方

祝言は挙げたのだから、正式な夫婦として周囲に認められたことになる。

女はその後、火の一族が所有する広大な敷地の一番奥まった場所にある居室に住まっていた。すぐ裏まで山裾が迫っている静かな佇まいで、このたびの婚礼に合わせて建てられたものである。部

屋数も居室としてはかなり多く、使われている木材やその他の材料も選りすぐりのものばかりであった。

しかし、婚礼より一月も過ぎたというのに、雷史は未だその場所を一度も訪れたことがなかった。

「お方様、やっぱりこれはどう考えてもおかしいと思います。一度、ご主人様とお話し合いの席を設けた方がよろしいのではないですか？」

その日、朝餉の膳を下げたあと、柚羽が意を決したように申し出た。

「私っ、……もうこんなの、我慢できません……！」

幼い顔立ちを苦しそうに歪めているその様子からも、彼女がかなり思い詰めているのがわかる。始終居室に籠もっている秋茜とは違い、この娘は三度三度の膳の上げ下げや、その他の用足しをするために今の御領主、つまり雷史の父が住まう本館に頻繁に足を運んでいた。

そこでは本人の意思には関係なく、さまざまな噂話を耳にしてしまうことになる。館暮らしの短い彼女にとって、自分の女主人が心ない中傷に晒されるのは、あまりに耐え難く我慢ならないことなのだろう。どんな話も黙ってやり過ごすことができるようになるまでには、まだまだ時間が必要であった。

「も、もしや、なにかご事情がおありなのかも知れませんし……」

夫婦の問題に口を出すなど、あまりにも無礼な行為であるということは、本人も承知しているのだろう。こうして話を切り出す覚悟を決めるまでに、相当な葛藤があったはずだ。

秋茜は自分の侍女の今にも泣き出しそうな表情を、しばらく静かに見つめていた。やがて、小さくため息を吐く。

「あちらのご様子は、余市がきちんと伝えてくれているでしょう。それならば、もう十分ではありませんか」

「でも――」

幼い侍女は、それでもさらに食い下がる。そのとき、大きく開いた窓から涼やかな気が流れ込んできた。部屋奥にいたふたりの髪が、静かに舞い上がる。しばしの静寂のあと、秋茜がふたたび口を開いた。

「今日はこれから、行李を開けて衣の手入れをしましょう。大仕事になりますから、あなたにも頑張ってもらわなくてはならないわ」

「……お方様！」

自分の言葉をするりとかわされてしまい、柚羽は思いあまったように叫んでいた。しかし、その声に振り向いた秋茜は、ただ静かな微笑みを浮かべるばかり。

「さあ、早く始めましょう。あなたには新しく覚えなければならないことがたくさんありますよ。これから先も必要になることばかりですからね、しっかりと身につけていかねばなりません。わかりましたね」

柚羽は唇を噛みしめると、そのまま悲しそうに俯いてしまった。

西南の集落は温暖な土地柄であり、夏の訪れがとても早い。ついこの間まで、あたりは春の花が

盛りであったはずなのに、今ではもう少し歩くと汗ばむほどになっていた。森や遠くの山の緑も、くっきりと色味を濃くしている。

通い慣れた道を一刻、約二時間ほど歩いて、雷史は西南の大臣家へと出向く。近頃では父のお供ではなく、単独で出掛けることも多くなっていた。

到着するとすぐに、大臣である邇桜様の下に上がる。今回は急なお召しであり、通常の出仕とは異なっていた。

邇桜の部屋は大臣家の本館の一番奥に位置する。

あまりに広い邸宅、しかも複雑に入り組んだ間取りで、渡りの進み方を間違えるととんでもなく遠回りになってしまう。いったいどれだけの部屋があるのだろう。月に一度の出仕も五年目になるというのに、まだ謎の部分が数多くある。

この館は、西南の集落の居住まいと、都以北のそれが混在している不思議な造りになっていた。椅子に座し寝台を使う部屋もあれば、板間の上に直接敷物を敷いて座する場所もある。大臣の部屋は後者の様式であった。

「あれは、息災にしておるか？」

西南の大臣は一段高い奥の座にどっかりと腰を下ろし、鋭い眼差しで雷史を見下ろしていた。堂々とした体格であるが、衣の下に無駄な肉がついているというわけではなさそうである。白髪染めを施し、しっとりと整えた赤髪に濃い眉、その下にある目の前の者を射貫いてしまうかのような厳しい瞳。浅黒い肌は生気に充ち満ちている。赤髪に褐色の肌、というのが西南の民を表す形容

であるが、その言葉を誰よりも体現しているのがこの御方であると言えよう。

恐ろしい風貌の大臣は、たいへんな好色であることも広く知られている。この大臣に召されて異を唱えることのできる女子などどこにもいないだろう。

「……はい」

「あれ」と大臣が指した相手は他でもない、この間頂戴したばかりの「戻り女」のことである。頭を低く垂れたまま返答をしながら、その響きが多少歯切れの悪いものになってしまったことを後悔する。だが無理もない、見てもいないものをそれらしく説明するのは難しいことだ。

「それならば良い、あれは儂の腹違いの妹の娘であるからな。どうしても気になってしまうのだ。その言葉を聞いて、安心したぞ」

そう告げたあと、彼は手にした扇を揺らしながら満足げに笑い声を上げる。大臣の声は大きく張りがあり、聞く者を圧倒する底知れぬ迫力があった。

この方の前に出るたびに、嫌でも我が父の人としての器の小ささを感じさせられる。どうしてこのように堂々とした立ち振る舞いができるのだろう、この人には迷いというものが微塵も感じられない。

御年七十を超えてなお、見る者を圧倒する隆々とした姿。この先も長く西南の地に君臨することは間違いないだろう。

「それではひとつ、頼まれてはくれまいか」

大臣はそう言い、懐から畳んだ紙を取り出した。手のひらに余るほどの大きさのそれは、長い紙

を幾たびも折って形作られている。それがこの土地の送り文の基本的な様式であった。
「あれに文をしたためた。雷史、お前の手でこれをあの者に渡して欲しい」
「……承知いたしました」
両手を差しだし、うやうやしく受け取った文は、薄くもなく厚くもないごくごく普通の重みであった。それを懐に収めたところで、ゆっくりと面を上げる。その姿を大臣は、なにやら言いたげな微笑みで見つめていた。

雷史が祝言を挙げたその夜に前の居室に戻ってしまったという話は、翌朝にはすでに屋敷じゅうの噂になっていた。使用人たちが陰であれこれ噂をしているのは知っている。だが、さすがに表だってこちらになにかを言ってくる者はない。あの父ですら、見て見ぬ振りを続けているのだ。それならば、誰に気兼ねする必要がある。
注目されることでますます意固地になり、さらに奥の居室から足が遠のく。あちらの様子は余市に命じて日々確かめさせていたが、その報告を聞くことすら億劫であった。
自らが望んで頂いた女子ではない、どうしてもと言われたから仕方なく承知したまでだ。あの者の存在を受け入れることは、大きな権力の前に屈するのと同じである。そんなことはまっぴらだった。
本館での一日の務めが終われば美祢の待つ居室に戻り、気が向けば情けを掛けてやることもある。時には敷地を抜けたところにある宿場町やその向こうの村まで繰り出し、ねんごろになった女を抱く。そんな風にして、以前と少しも変わらぬ生活を続けていた。

――しかし、このたびはどうしたものか……
大臣家から戻る道すがら、幾度となくその文を懐から出して確かめる。西南の大臣は何故、わざわざ自分を呼び寄せ、この文を託したのであろうか。まさか、不仲であることを悟られたのでは？　……いや、そのようなことはあるまい。
様々な想いが胸を過ぎり、ついには目の前の文を開いて中を確かめたい衝動に駆られた。それをどうにか思い留まり、またひとつ大きくため息を吐く。
この文をあの者に届けるだけなら造作もないことだ、余市にでも任せてしまえばそれで用が足りる。だが、どういう訳かこの文だけは、自分で渡さなくてはならないような気がした。
邇桜様の眼差しには、その瞳に映らないものすら見透かしているような不思議な力がある。真っ直ぐに見据えられると、もう逃れられない。我が父がそうであるように、自分もまた腰抜けなのだろうか。

「火の一族」が住まうこの地域は、すでに夏の盛りを思わせる陽気であった。
毎年、この頃になると衣をごくごく薄いものにしても日に何度も着替えなければならなくなる。そのため、点在する館や居室の庭先には、いつでも水洗いした肌着や色とりどりの衣が揺れていた。
侍女たちが忙しくそれらの手入れをしている姿を横目でちらりと見る。たすき掛けをした薄水色の装束が夏らしく涼しげだ。女たちは動きやすいように髪を高い場所に結い上げている。
敷地の隅々まで、季節の花が咲き乱れていた。地に根を張り柔らかく気の流れにそよぐ草花や、

木々の枝にびっしりと咲き誇る薫り高いものまで、どれも気持ちの良いほどに手入れが行き届いている。大臣家では冴えない姿ばかりをさらしている雷史の父も、自分の屋敷の手入れには余念がなかった。草木の中にはこの土地には珍しい種類のものも多く見られる。

今、目の前に広がっているのは、見渡す限り濃青の花園。片方の手のひらに包み込めるほどの、菊によく似た形の花弁が、すっと伸びた茎の上に開いている。丈はちょうど雷史の腰のあたりだった。一斉に揺れるその姿は、まるで波打つ海面のよう。もちろん、海底に住まう雷史が「海の面」など知るはずもなかったが、さざ波立つこの花たちの姿はとても好きだった。

ここ数年はなにかと気ぜわしく、敷地の奥まで足を運ぶこともなくなっていた。久方ぶりに見る花々のさざめきに、しばし目を奪われる。その生気を吸い込んで、彼は大きく深呼吸した。

花園の彼方には、浅黄に滲む場所がある。天が途切れるその部分は、海底の民にとって決して足を踏み入れてはならない禁域とされていた。

この地に住まう民たちは陸上の人間と外見はほとんど同じだ。ただ、その耳だけはエラのように大きくせり出し、空気よりも重い「気」で満たされた空間の中でも生活していける身体になっている。そうは言っても、彼らは魚と同じように海中を自由に移動できる訳ではない。

この地で竜王が絶対的な権力を持っているその背景には、彼だけが使う「妖しの力」がある。海底の限られた部分だけに「結界」を張り、海底人が住まう場所を造り出すのだ。職業や地位が世襲制であるように、竜王の能力も代々受け継がれていく。

次の竜王と誰もが認めている亜樹は、西南の大臣、邇桜の子息のひとりであるのと同時に、母上

が現竜王の姉君という竜王家の血筋でもある。どこまでも恵まれた身の上だ。

このたび雷史の下へとやって来た戻り女は、表向きは侍女という名目で都の竜王家に仕えていたが、その真の目的が側女となり亜樹の子を授かることにあったのは誰の目から見ても明らかである。他にも同じように大臣の命を受けてお側に上がった女子が十人は下らなかったと聞いている。それならば、彼女たちの間には、言葉では言い尽くせないほどの確執があったことだろう。

女子同士が寵を争っていがみ合う姿は、なにも竜王御殿の側女のみに限った話ではない。ある一定以上の家柄であれば、どこでも起こりうる話であり、雷史も幼き頃から女たちの醜い争いを目の当たりにしてきた。

雷史の父は、どうにもならないほどの好色であり、次々と新しい女に手を出している。もちろんそれは彼ほどの地位にある者なら当たり前のことで、そう目くじらを立てることでもない。領主である父の寵を受けて不自由のない生活をしようと企む女たちは、裏であの手この手の策を練り、時にまだ子供だった雷史までを自分の味方にすべく手なずけようとした。

ましてや、竜王様のお世継ぎを産み国母となる可能性があるのだとしたら……それに至るまでの茨道は想像を絶するものになるだろう。女同士の争いに敗れ、志し半ばで里に舞い戻ってくる者も少なからずいると言われる中で、あの者は解雇を申し渡されるまで五年もの間、お役目を続けてきたのである。きっと気位の高い鬼のような女だろうと考えていた。

――しかし。

婚礼当日に雷史の前に現れたその者は、驚くほど頼りなげで、本当の年齢よりもかなり若く感じ

られた。見た目では自分とどちらが年上か判断がつかぬのではないかと思われるほどに。
しかもなにが辛いのか、始終打ちひしがれたようにうなだれたままでこちらを見ようともしない。半日もの長い時間を並んで座していても、ただひとことの言葉を交わした記憶もないのである。
流れる赤髪は彼女の動きに合わせて不思議な輝きを見せていたが、とうとうそれに触れる機会もなく終わってしまった。あの者は全身で雷史を拒否していた。長いまつげに隠された瞳が、その表情を隠す。自分の存在までもを否定され、愛情など湧きようもない。それどころか、憎しみばかりが募った。そんな無礼者を、どうして訪ねる必要がある。
しかし、気持ちは未だ迷いつつも、彼の足はついに屋敷の一番奥まで進んでいた。
目の前には、朱塗りの壁に白の瓦屋根、優美な彫刻を施した外柱が目を引く美しい居室がある。完成の予想図には目を通していたが、本物を見たのは今日が初めてだった。自分の居住まいであるはずのその場所が、他人顔で見下ろしている。そう思うだけで、新たなる怒りがこみ上げてきた。
——だがここまで来てしまったのだ、さっさと用事を済ませて戻ろう。
そう自分に言い聞かせ、入り口から中をうかがう。と、同時に中から人影が飛び出してきて、危うくぶつかりそうになった。
「きゃあああっ！　も、申し訳、ございません！」
胸の下で、なにやらけたたましい叫び声がする。恐る恐る視線をそちらに向けると、なんと女の童ではないか。伸びかけの髪は肩の下のあたりまで、額髪も真っ直ぐに下ろしている。袖をたすき掛けにしているところを見ると、なにかの作業中だったのだろう。

「……あっ、大変！」
娘は小さく叫ぶと、足下に散らばった衣たちを慌てて拾い上げている。それにしてもおぼつかない手つきだ。ひとつ拾って腕に掛け、もう一枚を拾ったところで先の一枚がふたたび床にこぼれる。思わずこちらが手伝ってやりたくなるほどの、不器用さであった。
その娘はようやくすべてを抱えて面を上げたところで、今度は口をぽかんと開けたまま表情を凍らせた。
「こっ、……こここ……これはっ、ら、雷史様……っ！」
いったい、この者はなんなのだろう。しつけが行き届かないにも程がある。もしや、わざとやっているのではあるまいか。あまりの至らなさに、新しい怒りすらこみ上げてくる。
「なんだ、主が渡るのになにか不都合でも？」
まったく、なんというひどい出迎えだろう。思わず強く睨み付けると、娘は慌ててその場にひれ伏した。
「おっ、おおお、お出でなさいませ！」
雷史は懐から預かった文を取り出して、その者の頭上に投げつけようとした。まさに腕を上げた、そのときである。
「——どうしました、柚羽。なにやら大きな物音がしたようですけど……」
居室の奥から、澄み渡った声が響いた。続いて、さらさらと衣擦れの音がする。薄暗い中であったが、それで声の主がこちらに近づいてくるのがわかった。

「あ、あのっ！　お方様――」
姿勢を低くしたままの娘が慌てて振り向き、震える声を上げる。雷史の周りの気が、その瞬間に不思議な色に輝いた。
――この女だ。
ふわりと重ねの袖が翻る。暑苦しい陽気の中、その不快さをまったく感じさせない立ち振る舞い。ああ、間違いない。
「……あ……」
微かにその口元が震える。雷史の姿を映した濃緑の瞳が、一瞬揺らいだ。
しかしその直後、彼女はなにごともなかったかのように雷史の足下近くまで音もなく歩み出る。そして美しい地模様を施した重ねの裾が地に着くのも構わず、片膝をついて跪く。
「お帰りなさいませ」
それは未だかつて聞いたこともない美しい音色であった。呼びかけられただけのはずなのに、まるで歌声のように胸に染み込んでくる。
主を迎える挨拶の作法は今までにも数えきれぬほど見てきたというのに、この者の姿はまったく別物に感じられる。ひとつところに留まることなく流れゆく、あまりに美しい一連の動作だった。
雷史はごくりと唾を呑んだ。なにか言葉をかけなければと思いつつも、どうにも声が出ない。みっともないくらい、うろたえている自分自身に戸惑っていた。
「西南の大臣様から、お前に文を預かってきた。ただそれを届けにきただけだ！」

彼女の側に文を投げつけると、乱暴に言い捨てた。そして、すぐにくるりときびすを返す。
「あ、雷史様――」
背中に届いた声も無視する。振り向いてその者の顔を見ることなど、どうしてもできないと思った。どうしてここまで心乱れる必要があるのだろう。
一瞬目にしてしまった美しい立ち姿が繰り返し脳裏に浮かび、雷史を混乱させる。あてどなく屋敷の中をさすらいながら、雷史は自分自身のすべてを持てあましていた。

その夜、足が何故そちらに向いたのかはわからない。
久しぶりに兄弟が揃って酒を酌み交わし、十分すぎるほどに酔いが回っていた。次の領主となることが決まっている雷史には、皆が気を使う。上手い具合に機嫌を取ってもらえることもあって、今宵はついつい飲み過ぎてしまった。
外に出ると、遙か上空、すなわち海面から注ぎ込んでくる月の光が無数の帯となって揺らめいている。なんとも幻想的な情景だ。大地から立ち上る黄金の柱のようにも見える。その中へ分け入ってそぞろ歩きするのは、なかなか良い気分だった。
影になった森の中で、木々の枝がカサカサと擦れ合って揺れる。気がゆっくりと流れているらしい。蒸し暑い真夏の夜も、ささやかな気流が涼しさを運んでくれるのだ。
「あの、若様……？」
いつもの居室とは反対の方向へと足を向けた主人を不思議に感じたのだろう、余市が声を掛けて

きた。しかしそれには気づかぬ振りをする。その後も、頭上に月がいる場所を目指して足を進めた。

大臣様の文を奥の居室まで届けてから、また幾らかの日々が経過していた。

あの日、ちらと垣間見ただけの女の顔が、その後も時折頭に過ぎる。そのたびに胸を突くような痛みを覚えた。

人形のごとく整った、あまりに美しい顔立ちであった。正直、あれほどの女子は今まで見たことがない。

婚礼の当日は雷史自身も緊張していた上に、女の方もたいそうな化粧を施していた。化粧というものは、念入りにすればするだけ美しくなるのだろうと考えていたが、どうもそうではないらしい。あの日、居室の奥から姿を現した彼女は、薄化粧だからこそ内面から出る色香が際立っていたように思う。

あのあと、いつもの居室に戻り、美祢の出迎えを受けたときに愕然とした。それまで、相当な上玉だと信じて疑わなかった愛妾の姿やその立ち振る舞いが、急に色あせて見えたのである。これには我が目を疑うしかなかった。

――あれが、我が妻なのだ。

男として、この事実が嬉しくないはずはない。側に置くのならば、見目麗しく、しかも聡明な女子であった方が良いだろう。あれならば、どこに出しても恥ずかしくない上玉だ。

だが、やはりどうすることもできない。今さら、嬉々として奥の居室に出向くのもどうかと思う。しかも、なによりあの者のよそよそしい態度がかんに障った。

――何故、夫である自分を見て、にこりともしないのだろう。

考えてみれば自分は、婚礼後の三日の通いすら無視するような男なのである。そんな夫に愛想を振りまく必要もないと判断したのかも知れない。だが、それでも雷史は面白くなかった。どうしても、あの者に軽んじられているように思えてならない。

今までずっと、領主の跡目として特別の扱いを受けてきた。西南の大臣家に出仕した折にも、そこに仕える女たちから思わせぶりに色目を使われることが少なくない。だからこそ、あの女の態度はどうにも理解できなかった。

「お前はもう、戻っていいぞ」

雷史は背中を向けたままで、あとをついてくる余市に言い放つ。

「はい、……でも」

今まで大股に歩く主人に息を切らせながら従っていた下男は、驚いて聞き返してきた。

「これから、里にでも下りてひと遊びしてくる。お前が一緒ではなにかとやりにくい、わかったらさっさと去れ！」

馴染みの女の下に向かうもよし、初めての女子を味わうのも悪くない。生娘であろうと人妻であろうと、領主の跡目の相手をすることに異を唱える者などいるはずもないのだ。それが、この世界の常識である。

余市の足音が遠ざかったあと、脇の細道に逸れて村へと向かおうとした。

――と。

そのとき、雷史の目の前に青の草原が突然現れた。

よくよく見れば、あの花園ではないか。天の光に照らし出されたその場所は、暗い部分と明るい部分の対比がはっきりしていて、昼間のそれよりもさらに美しい。花の色がさらに濃く、群青に近いように見えた。ねっとりと重い夜の気が作り出す波が、こちらへこちらへと誘いかけているようにも思える。

いつの間に、こんな場所まで歩いていたのだろう。まるで夢を見ているような心地だった。

呆然と立ちつくす雷史の目の前を、不意に人影が過ぎった。濃い青色の重ねがその姿を隠し、ほとんど花の色と同化して見える。

まさか、と思う。しかし、見まがうはずもなかった。

あの、美しく流れる髪の持ち主を、雷史が忘れるはずはない。少し荒れた気の流れに、そのまっすぐな髪がさらさらと広がっていく。それはまるで紅色の河のごとく、その一本一本に生命が宿っているかのように揺らめき、幾重もの帯となり、美しく浮遊する。向こうはこちらに背を向けており、雷史の存在には未だ気づいていない。

――何故夜歩きなど。女子の身でありながら、あまりにみっともないではないか。しかも供のひとりも連れずとは、常識はずれな行動である。

そうは思っても、その姿から目を離せない。言葉もなく、ただ息を潜めて流れゆく様を見守っていた。そうしているうちに、彼女の姿は次第に花園の奥へと遠ざかっていく。まるで、自分の眼差しから逃れるためにそうしているように思えて、どうしようもない気持ちになった。

「秋茜――」

初めて、その名を呼んだ。自分の口からこぼれ落ちた響きが、なんとも甘美な調べに感じられる。

当然、人影は驚いてこちらを振り向く。長い髪が、そんな彼女の周りをゆっくりと漂っていった。

「……雷史様……」

彼女は己の瞳に映ったすべてが、にわかには信じられないように、驚愕の表情を浮かべる。そして、次の瞬間に数歩後ずさりした。無意識なのか重ねの前を押さえると、するりと視線を逸らす。その頃には彼女の髪が元通りに収まっていた。

「こんな夜更けに供も連れず、一体どういうつもりだ」

しかし、彼女は俯いたままでなにも答えない。そうして嵐が過ぎるのを待っているのだろうか、これだけの至近距離でこちらの声が聞こえぬ訳はないのに。黙っていれば、そのうちに諦めるとでも思っているのか。

「おい！」

次の瞬間、雷史は自分自身も驚く行動に出ていた。目の前の花園に分け入って、妻の下へと歩み寄る。間髪容れない素早さであったから、逃れようとさらに後ろに下がろうとした彼女の動きを封じ、その細い腕を捕らえた。

「こちらの質問に答えぬか、いったいこんな夜更けになにをしているのだ！」

そのまま力任せに引き寄せる。声にならない叫びと共に、女の身体が雷史の胸元まで崩れ込んできた。

「は、花を……花を愛でておりました。供の者は、すでに休んでおります……」

恐怖のあまりか大きく震えているが、やはり透き通った綺麗な響きだ。人の声というものが、こんなにも匂やかに艶やかに胸に落ちてくるのかと改めて驚かされる。

しかし、未だ俯いたまま。こちらと視線を合わせようとしない。

――夫である自分から、このように逃れようとするとは……！

今まで自分がこの者にどんなに無礼な態度をとり続けてきたか、そんなことはこの際関係なかった。どす黒い怒りが、胸の奥からふつふつとこみ上げてくる。細腕を握りしめる手にさらに力を込めると、いよいよその痛みに耐えかねたのだろう。彼女は抗議の色をその顔にうっすらと浮かべて顔を上げ、こちらに向き直った。

「……な……！」

その瞬間、雷史の目は自分に向けられた表情よりも、彼女が重ねの下に身につけていた装束に釘付けになった。それは純白の夜装束、すなわち――婚礼の夜に身につける特別な衣装。

一瞬我が目を疑ったが、よくよく考えればそれも当然のことである。この者と自分とは一度も夜を共にしていない。だから、彼女は普通の夜着を用いることが叶わないのだ。

だがしかし、雷史は不意に皮肉めいた笑いがこみ上げてきた。

「まったくもって、おかしなものだな」

女の白い顔が、少し歪んだように見える。しかし、一度滑らかに動き出した舌は、もう止まらなかった。

「お前は戻り女ではないか、それなのに純白の衣装など、よくもまあ恥ずかしげもなく身につけられるものだ。どうせなら、汚れたその身にふさわしい、闇色の衣装を特注すれば良かったのに――」

そこまで言いかけたとき、それまでなんの抵抗も見せなかった女が、急に暴れ出した。雷史の腕を強い力で振り切って、そのまま逃れようとする。彼女の激しい動きに合わせて、長い髪が揺らめく。まるで頼りない身体を雷史から護ろうとするように。

「この……！」

彼女の方も必死だったに違いない。気づけば手の甲を思い切り引っ掻かれていた。鋭い痛みに、わずかに残っていたはずの理性もどこかに飛んでしまう。

刹那、花園がふたつに割れた。

いったいなにが起こったのか、咄嗟には自分でもわからなかった。気がつくと秋茜が仰向けに倒れており、その上に我が身が覆い被さっている。なんて簡単にねじ伏せられるのだろう、不思議な心地が胸を満たしていく。

月明かりに浮かび上がった彼女の表情は、怒りとも戸惑いとも判断しかねるものであった。それでもやはり美しい。青白い光に照らし出され、その白すぎる肌が透けてしまいそうに思える。四方に広がった紅の河が押し倒された花の青や葉の緑と絡み合っていた。

互いの顔をはっきりと瞳に映し出しながら、見つめ合う。そんなふたりの間をゆっくりと夜の気が流れていった。長い長い沈黙が続く。

それは永遠のようにも思え、また一瞬のことのようにも感じられた。

立ち読みサンプル
はここまで

「……お離しくださいませ……」

か細く、今にも消え入りそうな声が雷史の耳に届く。彼女は、どうにかして雷史から逃れようとするように、顔を背けていた。両腕が捕らえられてしまった今、それがこの者にできる唯一の抵抗である。

「何故、そのような願いを受け入れる必要がある――」

冷たい拒絶の言葉が、新たなる怒りを雷史の心に運んでくる。じわじわと胸に広がっていく炎が、やがて雷史の内面のすべてを焼き尽くしていく。

「……嫌っ……」

花園の底は少しぬかるんでいる。雷史の指先が、泥にめり込んだ。

「俺はお前の夫ではないか。どうして拒否する必要がある」

自分自身のその言葉が、引き金になったのか。次の瞬間には、白く浮き上がった女の首筋に噛みつくようにしゃぶりついた。たちどころに小さな悲鳴が上がるが、その声も、ふたりの身体までもが、細い葉と茎に覆い隠されてしまったように思えた。強い花の香りがあたりに漂い、背後からは金の輝きが差し込んでくる。

そのとき心にあったのはただひとつ、怒りという感情だけであったように思う。

だが、もしも今まで女を抱くときにそれ以外の感情があったのかと聞かれると、首を傾げるしかない。いつでも行き場のない憤り(いきどお)を抱えており、女を抱くことはそれを吐き出すための手段だった気がする。だから相手が誰であったとしてもたいして違いはなかった。